

日蓮大聖人御書全集

きょうしきじこくしょう

教機時国抄

きょうきじくしょう

# 教機時國抄

弘長2年(62)2月10日41歳

本朝沙門日蓮これを註す。

一に教とは、釈迦如來の説くところの

と

一切の經・律・論、

五千四十八卷四百八十帙、天竺に流布すること一千年。仏

の滅後一千一十五年に当たつて、震旦國に仏經渡る。後漢

こうめいこうてい

えいへいじゅうねんひのとう

とう

げんそうこうてい

かいげん

の孝明皇帝の永平十年丁卯より唐の玄宗皇帝の開元

じゅうはちねんかのえうま

いたるつびやくろくじゅうしきい

あいだ

いつさいきょうわた

お

わんぬ。

この一切の經・律・論の中に、小乘・大乘、權經。  
実經、顯教・密教あり。これらを弁うべし。この名目  
は、論師・人師よりも出でず、仏說より起ころ。十方世界の  
一切衆生、一人も無くこれを用いるべし。これを用いざる  
者は外道と知るべきなり。阿含經を小乘と説くことは、方  
等・般若・法華・涅槃等の諸大乗經より出でたり。法華經  
には「一向に小乘を説いて法華經を説かざれば、仏慳貪  
に墮すべし」と説きたもう。涅槃經には「一向に小乘經  
を用いて仏を無常なりと云わん人は、舌口中に爛るべし」

云々。  
うんぬん

二に機とは、仏教を弘むる人は必ず機根を知るべし。  
しゃりほつそんじや  
舍利弗尊者は、金師に不淨觀を教え浣衣の者には數息觀を  
おし  
教うるあいだ、九十日を経て、化するところの弟子、仏法を  
くじゅうにち  
一分も覺らずして還つて邪見を起こし、一闡提と成り畢わ  
いちぶん  
かえ  
ほとけ  
じやけん  
お  
いっせんだい  
な  
お  
んぬ。仏は、金師に數息觀を教え浣衣の者に不淨觀を教え  
ゆえ  
こんし  
すうそくかん  
おし  
かんえ  
もの  
ふじょうかん  
おし  
んぬ。仏は、金師に數息觀を教え浣衣の者に不淨觀を教え  
しゅゆ  
あいだ  
さと  
たもう。故に、須臾の間に覚ることを得たり。智慧第一の  
しゃりほつ  
まつだい  
ちえだいいち  
舍利弗すら、なお機を知らず。いかにいわんや、末代の凡師  
がた  
け  
は、機を知り難し。ただし、機を知らざる凡師は、化する  
き  
し  
ぼんし  
け

とこころの弟子に一向に法華経を教うべし。

となかれ」との文は、いかん。

答えて云わく、機を知るは智人の説法することなり。また謗法の者に向かつては、一向に法華経を説くべし。毒鼓の縁と成さんがためなり。例せば不輕菩薩のことし。また、

智者と成るべき機と知れば、必ずまず小乗を教え、次に権大乗を教え、後に実大乗を教うべし。愚者と知れば、必ずまず実大乗を教うべし。信・謗共に下種となればなり。

さん とき

ぶつきょう ひる

ひと かなら とき し

三に時とは、仏教を弘めん人は必ず時を知るべし。

たと

のうにん

あきふゆ

た つく

たね

ち

ひと

こうろう

譬えば、農人の秋冬に田を作るに、種と地と人の功劳と

たが

いちぶん やくな

かえ そん

いつたん つく もの

だいそん はるなつ

こうさく

は違わざれども、一分も益無く、還つて損す。一段を作る者は少損なり。

いっちょにちょうとう もの

だいそん みなぶんぶん やくあ

はるなつ ほう ひる

こうろう ときな

一町二町等の者は大損なり。春夏に耕作すれば、上・中・下に随つて、皆分々に益有るがごとし。

いつちよう しだが

しだが したが

だいそん はるなつ

こうさく ほう ひる

こうろう ときな

仏法もまたまたかくのごとし。時を知らずして法を弘めば、益無き上、還つて惡道に墮つるなり。仏世に出でたまいて

かなら うえ かえ

あくどう お

みなぶんぶん やくあ

こうさく ほう ひる

こうろう ときな

必ず法華經を説かんと欲するに、たとい機有れども時無き

ゆえ ほけきょう と

ほとけよ い

ほとけよ ときな

ほとけよ ときな

ほとけよ ときな

ほとけよ ときな

ほとけよ ときな

が故に、四十余年にはこの經を説きたまわず。故に、經に

ゆえ きよう

しじゅうよねん

きよう

と

ゆえ

きよう



もの

はかい もの

とも くよう

くよう

くよう

かなら

者をも破戒の者をも、共に供養すべからず。供養すれば、必ず

くに さんさいしちなんお

くよう

もの かなら

むけんだいじょう お

ず国に三災七難起こり、供養せん者も必ず無間大城に墮

ほけきよう

ぎょうじや

ごんきょう

ぼう

しゅくん おや

つべきなり。法華経の行者の權経を謗ずるは、主君・親・  
師の、所従・子息・弟子等を罰するがごとし。權経の行者

ほけきよう

しそく

で しとう

ばつ

ごんきょう

ぎょうじや

しゅくん おや

の法華経を謗ずるは、所従・子息・弟子等の、主君・親・  
し

ばつ

とうせい

まつぽう

い

師を罰するがごとし。また当世は、末法に入つて

にひやくいちじゅうよねん

じょじゅう

しそく

で しとう

ほけきよう

とき

二百一十余年なり。權経・念佛等の時か、法華経の時か、

能く能く時刻を勘うべきなり。

し くに

ぶつきよう

かなら くに

ひろ

四に国とは、仏教は必ず国によつてこれを弘むべし。国

くに

には、寒國・熱國、貧國・富國、中國・辺國、大国・小國、一向偷盜國・一向殺生國・一向不孝國等これ有り。また一向小乘の國、一向大乘の國、大小兼學の國もこれ有り。しかるに、日本國は、一向小乘の國か、一向大乘の國か、大小兼學の國なるか、能く能くこれを勘うべし。

五に教法流布の先後とは、いまだ仏法渡らざる国には、いまだ仏法を聽かざる者あり。既に仏法渡れる国には、仏法を信ずる者あり。必ず先に弘まれる法を知つて、後の法を弘むべし。先に小乘・權大乘弘まれば、後に必ず實大乘

ひろ さき じつだいじょうひろ のち しょうじょう ごんだいじょう

ひろ ひろ ひろ ひろ ひろ ひろ ひろ ひろ ひろ  
を弘むべし。先に実大乗弘まれば、後に小乘・權大乗を  
弘むべからず。瓦礫を捨てて金珠を取るべし。金珠を捨て  
て瓦礫を取ることなかれ已上。

ほけきょう いつきいきょう なか だいいち きょうおう にほんこく こくし な

この五義を知つて仏法を弘めば、日本国の国師と成るべ  
きか。

ほけきょう きょう し もの こうたく ほううん どうじょう し  
いわゆる、法華経は一切経の中の第一の經王なりと知

るは、これ教を知る者なり。ただし、光宅の法雲、道場の

えかんとう ねはんぎょう ほけきょう すぐ しおうりょうざん ちようかん  
慧觀等は「涅槃経は法華経に勝れたり」と。清涼山の澄觀、

こうや こうぼうとう けごんきょう だいにちきょうとう ほけきょう すぐ  
高野の弘法等は「華嚴經・大日經等は法華経に勝れたり」

こうや こうぼうとう けごんきょう だいにちきょうとう ほけきょう すぐ  
弘むべからず。瓦礫を捨てて金珠を取るべし。金珠を捨て

かじょうじ きちぞう じおんじ きほっしとう はんにや じんみつとう にきょう  
と。嘉祥寺の吉藏、慈恩寺の基法師等は「般若・深密等の二経

ほけきょう すぐ

てんだいさん ちしゃだいし

いちにん

は法華経に勝れたり」という。天台山の智者大師ただ一人の

いつきいきょう なか ほけきょう すぐ

た

み、一切経の中に法華経を勝れたりと立つるのみにあらず、

ほけきょう すぐ

きょう あ

い

もの かんぎょう

「法華経に勝れたる経これ有りと云わん者を諫曉せよ。

や ほけきょう すぐ

げんぜ したこうちゅう ただ

ごしょう あびじごく

お

止まずんば、現世に舌口中に爛れ、後生は阿鼻地獄に墮つ

とううんぬん

そ う い よ よ

わきま

も の

べし」等云々。これらの相違を能く能くこれを弁えたる者

きょう

し

も の

は、教を知れる者なり。

とうせい せんまん がくしやとういちいち

まよ

当世の千万の学者等一々に、これに迷えるか。もししか

きょう

し

も の

すく

きょう

し

も の

な

らば、教を知れる者これ少なきか。教を知れる者これ無け

れば、法華經を読む者これ無し。法華經を読む者これ無ければ、國師たる者無きなり。國師たる者無ければ、國中の諸人、一切經の大小・權實・顯密の差別に迷つて、一人においても生死を離るる者これ無く、結句は謗法の者と成り、法によつて阿鼻地獄に墮つる者は大地の微塵よりも多く、法によつて生死を離るる者は爪上の土よりも少なし。恐るべし、恐るべし。

日本国的一切衆生は、桓武皇帝より已來四百余年、一向に法華經の機なり。例せば、靈山八箇年の純円の機たるにほんこく いつきいしゅじょう かんむ こうてい このかたしひやくよねん いつこうほけきよう き ほけきよう よ もの な ほけきよう よ もの な ほけきよう よ もの な

がごとし 〔天台大師・聖德太子・鑑真和尚・根本大師・安然  
かしょう えしんとう あ もの  
和尚・恵心等の記、これ有り〕。これ機を知れる者なり。し  
かるに、当世の学者云わく「日本国は一向に称名念佛の機  
なり」等々。例せば、舍利弗の、機に迷つて所化の衆を  
いつせんだい な  
一闡提と成せしがごとし。

日本国の当世は、如來の滅後一千二百一十余年、後の  
五百歳に当たつて、妙法蓮華經広宣流布の時刻なり。これ、  
とき し  
時を知れるなり。しかるに、日本国の当世の学者、あるいは  
は法華經を拠つて一向に称名念佛を行じ、あるいは  
ほけきょう なげう いつこう しようみようねんぶつ  
のち  
がくしゃ  
ぎょう

小乘の戒律を教えて叡山の大僧を蔑り、あるいは教外を立てる法華の正法を軽しむ。これらは時に迷える者か。例せば、勝意比丘が喜根菩薩を謗じ、徳光論師が弥勒菩薩を蔑つて、阿鼻の大苦を招きしがごとし。

日本国は一向法華経の国なり。例せば、舍衛国の一向往大乗なりしがごとし。また天竺には、一向小乗の国、一向大乗の国、大小兼学の国もこれ有り。日本国は一向大乗の国なり。大乗の中にも法華経の国たるべきなり

（瑜伽論・肇公の記・聖德太子・伝教大師・安然等の記、

これ有り。これ、国を知れる者なり。しかるに、当世の学者、  
日本國の衆生に一向に小乗の戒律を授け、一向に念佛者  
等と成すは、「譬えば、宝器に穢食を入れたるがごとし」等  
云々〈宝器の譬えは、伝教大師の守護章に在り〉。  
日本國には、欽明天皇の御宇に仏法百濟國より渡り始め  
しより桓武天皇に至るまで、二百四十余年の間、この国に  
小乘・權大乗のみ弘まり、法華經有りといえども、その  
義いまだ顯れず。例せば、震旦國に法華經渡つて三百余年  
の間、法華經有りといえども、その義いまだ顯れざりし

がごとし。桓武天皇の御宇に伝教大師有して、小乗・權  
がんむてんのう ぎょう でんぎょうだいしましま しょうじょう ごん

大乗の義を破して法華經の實義を顯せしより已來、また  
だいじょう ぎ は ほけきょう じつぎ あらわ このかた

異義無く、純一に法華經を信ず。たとい華嚴・般若・深密・  
あごん だいしょう じゅんいつ ほけきょう しん けごん はんにや じんみつ

阿含の大小の六宗を學する者も、法華經をもつて所詮と  
あかん だいしょう ろくしゅう がく もの ほけきょう しょせん

なす。いわんや天台・真言の學者をや。いかにいわんや在家  
むち もの れい しんごん がくしゃ ほけきょう ざいけ

の無智の者をや。例せば、崑崙山に石無く、蓬萊山に毒無き  
このかたいま ごじゅうよねん あいだ だいにち ぶつだ ぜんしゅう ひろ  
けんにん こうねん じょうどしゅう おこ じつだいじょう は ごんしゅう

がごとし。

建仁より已來今に五十余年の間、大日・仏陀、禪宗を弘  
けんにん こうねん じょうどしゅう おこ じつだいじょう は ごんしゅう

め、法然・隆寬、淨土宗を興し、實大乗を破して權宗に  
ほうねん りゆうかん じょうどしゅう おこ じつだいじょう は ごんしゅう

付き、一切経を捨てて教外を立つ。譬えば、珠を捨てて石を取り、地を離れて空に登るがごとし。これは教法流布の先後を知らざる者なり。

仏誠めて云わく「悪象に值うとも、悪知識に值わざれ」

等云々。法華経の勸持品に「後の五百歳・一千余年に当たつて、法華経の敵人に三類有るべし」と記し置きたまえり。

当世は後の五百歳に当たれり。日蓮、仏語の実否を勘うるに、三類の敵人これ有り。これを隠せば、法華経の行者にあらず。これを顯せば、身命をば定めて喪わんか。

ほけきょううだいし　い  
法華經第四に云わく「しかもこの經は、如來の現に在す  
すらなお怨嫉多し。いわんや滅度して後をや」等云々。同じ  
く第五に云わく「一切世間に怨多くして信じ難し」。また云  
わく「我は身命を愛せず、ただ無上道を惜しむのみ」。同  
第六に云わく「自ら身命を惜しまず」云々。涅槃經第九に  
云わく「譬えば、王使のよく談論して方便に巧みなるもの、  
命を他国に奉るに、むしろ身命を喪うとも、終に王の説  
くところの言教を匿さざるがごとく、智者もまたしかなり。  
凡夫の中において身命を惜しまず、かならず大乗方等を

宣説すべし」云々。章安大師釈して云わく『むしろ身命を喪うとも、教えを匿さず』とは、身は軽く法は重し。身を死して法を弘む』等云々。

これらの本文を見れば、三類の敵人を顯さずんば、法華経の行者にあらず。これを顯すは、法華経の行者なり。しかれども、必ず身命を喪わんか。例せば師子尊者・提婆菩薩等のごとくならん云々。

一月十日

日蓮 花押